

初等教育における理解を深める音楽鑑賞法

北 村 武

I 音楽鑑賞の意義

昭和55年度より小学校学習指導要領の改訂にともない、その改善方針として、「小学校においては、音楽を学習する喜びを得させ音楽的な感覚を養う。」とある。また、具体的事項には、五領域（基礎・鑑賞・歌唱・器楽及び創作）を、「表現」及び「鑑賞」の二領域に整理統合され、鑑賞領域は、「進んで音楽を聴こうとする意欲を高めることを重視しながら、「鑑賞」の領域を整理して構成する。」という内容が掲げられている。

鑑賞教育においては、進んで音楽を聴こうとする意欲を高め、聴くことによってより深く音楽を理解すると同時に、「表現」の充実をも配慮しながら教育をおしすすめるなければならない。鑑賞と表現とは、表裏一体であり、つまり、優れた鑑賞者こそよりよき表現者となり得るのである。ただ単に、音楽鑑賞をレコードによる鑑賞のみに終って、十分な理解はおろか、児童の音楽的資質の進展もあり得ない。児童が、音楽を心から楽しみ真に音楽的な発達をするなかで、豊かな生活の営みができるよう育成する鑑賞教育を、推進せねばならない。

James, L, Mursell は、音楽鑑賞について次のように述べている。「鑑賞とは、児童達に音楽を愛好する心情を喚起させ、音楽をより深くより賢明に育んでいこうとする音楽教育の推進力である。」音楽を学習しようとする意欲は、先ず音楽を聴こうとする態度から生じるものであり、鑑賞により、個々のもつ音楽性をよび起し、興味かつ創造的な働きがうながされるのである。音楽鑑賞においては、音楽美を味わわせることから出発せねばならない。児童が、その美に接し、感動を深め感受性を高めるとともに、音楽美に含まれる要素は何かという疑問から、音楽の構造・形式・リズム・旋律・和声・速度・音色・フレーズ感・強弱などの理解へと導くことが大切である。音楽美にあこがれ、児童自身が音楽を創りだそうとする意欲をかきたたせ、生活を豊かにするおいあるものにすることが鑑賞の役割といえよう。また、音楽鑑賞は、音楽の学習のあらゆる面に結びついたものであり、音楽を聴きそれに反応する能力がなければ、歌唱・器楽の表現の育成も難しく、また、創作においても創造性あるものが生みだされない。音楽鑑賞は、音楽を理解する上で、音楽に対するあらゆる感覚が築かれる基礎となっている。いわば、音楽的成長のために欠くことのできないその中核となすものである。音楽鑑賞にあたっては、常々、児童の音楽的能力を理解しておかねばならない。また、児童の音楽的発達にともない、鑑賞教材の研究及び指導内容を検討し、各学年に即した指導計画の立案をたて実践する

ことである。音楽の聴き方は、児童それぞれの音楽能力の違いによりかなりの差がある。幼児や低学年においては、旋律を口ずさんだり、リズムを感じながら聴くことにより、感覚的に音楽をとらえようとする。然し、中学年、高学年と進むにつれ音楽的な理解も深まり、音楽の構成の理解、作曲者あるいは演奏者の音楽表現を追求するようになる。このように鑑賞においては、音楽の理解力が深まるにつれ、鑑賞する内容が、感覚的なとらえ方から、知的、分析的な聴き方に変わっていく。James, L, Mursell は、鑑賞者の音楽のとらえ方について、次のように分類している。

情緒的な型

運動的な型

知的な型

さらに Weld は次のように分類している。

感情的な型

運動的な型

分析的、知的な型

このように音楽に対する反応のしかたは、児童達の音楽的能力の差によって違ってくるが、鑑賞指導においては、児童の音楽的な発達に即して指導を行わなければならない。児童の音楽能力を把握し、適切な鑑賞教材を選択し、選択された教材はなかみの濃い指導内容のもとに指導されることにより、児童の音楽能力の開発へとつながるものである。

II 子どもの発達と音楽鑑賞

音楽鑑賞を行う場合、子どもの発達を考えずしてその効果は求められない。「児童、生徒の発達段階にに応じて」という言葉がよく使われる如く、子どものもつ音楽的諸能力、また、精神的、肉体的、あるいは社会的な発達の総合理解のなかで、教材、指導内容などを研究することが大切である。人間の発達は、未分化―分化―統一というプロセスで発達するといわれているが、初等教育における低学年では、心身ともに幼児期の延長的特色を示し、まだまだ未分化な部分が残されている。このような時期に、知的あるいは分析的な鑑賞方法で指導したところで、理解が深まる鑑賞とはなりえないのである。この頃は、感覚的刺激を通して音楽を聴いて生活する間に、徐々に育っていく自然教育の中からその基礎が育くまれるのである。また、音感やリズム感覚などは、2～3歳ころから既に発達し、6～7歳になればその発達が一層顕著になるといわれている。このリズム感覚も、速いリズム、遅いリズム、単純なリズム、複雑なリズム、強いリズム、弱いリズムなどさまざまであり、その楽曲のもつ特徴あるリズムを、鑑賞の中から感覚的に理解することから始めさすことである。旋律感の理解についても、音楽の流れの中で美的感覚、即ち美しい音の流れにふれ美しく感じる心、楽しい音楽を聴き楽しく感じる心を育てることが大切である。また、子どもの成長で運動機能の発達を考えておかねばならな

い。リズムやメロディーを身体全体で感じ、調子をとって楽しむことが、低学年の特徴である。まだ未分化な時には、身体の一部での反応するよりも、心の動きは全身で行うのが常である。子どもの運動能力の発達は、「頭から足へ」と「中枢から末端へ」の発達が二大原則とされている。ある楽曲を聴き頭で感じたままを素直に身体表現さすことにより、一層鑑賞の効果があげられるであろう。音楽鑑賞により、最初から高度な音楽的能力の開発を求めることは、未分化な子ども達にとっては、望めないことであり、ましてや低学年から、静かな状態でおとなしく鑑賞さすことは、大変難しいことである。低学においては、特にリズム感覚及び楽しさをもなった鑑賞教材を選択し、身体表現を重視する指導を行うとともに、音楽的感覚を養うことが大切である。学習指導要領によれば、鑑賞に対する指導内容の目標に、身体反応をしたりとか、リズム、旋律、速さの特徴に気をつけて鑑賞することを目標とされている。このことは、低学年時の子どもの発達を考えた上での目標であり、指導に際しては、その目標に従って実践にあたらねばならない。音楽を愛好する心情を育てる第一歩としても、低学年の鑑賞のあり方が、如何に大切であるかを充分認識するとともに、音楽とともにあることが、楽しくてしかたがないという環境を作らねばならない。

中学年ともなれば、それまでの未分化な状態から分化の方向へと進んでいく。集団に対し強い意識が働く時期でもあり、学校生活においても、何かの目的をもって行動するようになる。また、それに加えて創造的な働きが増す時期でもある。身体的にも益々活動的となり、低学年に較べれば一段と成長する。音楽の学習においても、ただ単に音楽を楽しむことから脱皮し、音楽をより理解しようとする態度が身につく。また、集団の中で自分と他人との比較、物事への疑問などによって知的な欲求もあらわれ、音楽鑑賞においても、音色や楽曲の特徴などを意識しながら聴くようになる。また、その楽曲がどのような楽器で演奏されているか興味をいだいたり、他の楽器と比較して聴き分けることに対し興味をもったり、楽曲がどのような演奏形態で奏されているかなど、かなり鑑賞曲に対する聴く内容が豊富になる。低学年のように、感覚的に音楽をとらえようとするところから、音楽の表現が、どのような形で創造されているかという興味をもちはじめるのが、中学年の特徴といえよう。これは偶然に表われるものでなく、低学年からの音楽学習の積みあげと、中学年に達した時の心身の発達にともなって表出されるものである。低学年から中学年にいたっての発達にともない、鑑賞に際し、楽曲の選択、指導内容、評価など低学年における感覚的なとらえ方から、一段と進んだところへ主眼をおかねばならない。低学年においては、「リズム」「旋律」「速さ」など鑑賞の中で自然に身につける学習を積んでいる。中学年においてもより一層理解を深めるとともに、楽曲を特徴づけている要素にも気づかせることも考慮しなければならない。また、曲の形を理解さすためにも、主な旋律を笛で吹かせたり、時には指導者自らピアノ演奏し、主旋律が、どのように発展して曲がまとめられているかという聴く力を養うことも大切であろう。また音楽的な発達にともなって、鑑賞教材の楽器の音色などに興味をもちはじめ。中学年の鑑賞共通教材をみると次に示した

| 3年生鑑賞共通教材 | 主な楽器 |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| ○歌劇「輕騎兵」序曲 ○「メヌエット」ト長調 ○「ボロネーズ」 | トランペット バイオリン フルート バイオリン |

| 4年生鑑賞共通教材 | 主な楽器 |
|---|------------------------------|
| ○「白鳥」 ○「ホルン協奏曲」第一番 ＝長調 K412 第一楽章 ○「ガボット」 | チェロ ホルン クラリネット オーボエ |

表のように共通教材をみるかぎり、それぞれ楽曲の特徴づけている主な楽器の音色に親しみ、興味づけることを一つの目標としている。勿論その目標に従って指導にあたらねばならないが、然し、その目標のみに偏ることなく、広い視野にたって楽曲を聴かすということも忘れてはならない。集団の意識にめざめるこの時期においては、合唱、合奏などの美しさをとらえさせることも意義あることである。合唱、合奏の鑑賞により、集団の演奏の形及びその美しさにふれ、歌唱や器楽の

演奏表現においての工夫を考えさせることにより、鑑賞と表現の一体化がはかれ、一層音楽的な力が生みだされるのである。既に記した Weld の鑑賞における分類の中で、分析的、知的な型とあったが、中学年後半においては、身体的発達、音楽的発達にともない、徐々に分析的、知的な鑑賞のしかたに移行する時期と考えられる。然し、ややもすれば専門的な指導にまで深くおちいりやすいため、児童の音楽的能力を常々理解し、総合的な聴き方と分析的な聴き方を適宜考慮しながら、指導することが大切であろう。

高学年では、心身の発達が成人にほぼ近い発達をみせるといわれている。中学年と比較しても、情緒的にも知的な面においてもはるかに発達し、音楽のとらえ方も随分変化する。また、低学年、中学年に較べ鑑賞する力が養われ、落着いて聴くことができるようになり、多少長きにわたる大曲も聴くことが可能となる。児童の聴く力は益々増大し、楽曲を全体的に味わいつつ、楽曲の特徴づけている要素（リズム、メロディー、楽器など）を聴き分けながら、楽曲がどのような構成でまとめられているかといった点についても理解を示すようになる。したがって教材を選択する場合も、特徴あるリズム、メロディー、楽器の音色や形式のはっきりしたものを教材として選ぶことである。

鑑賞にあたっては、児童達の心身の発達及び音楽的能力の発達を判断し教材を選択し、選択された教材は、十分な教材研究のもとに指導されることにより、児童に鑑賞する楽しさ、喜びを得させることができるのである。

Ⅲ 音楽鑑賞の指導

イ 低学年の鑑賞指導

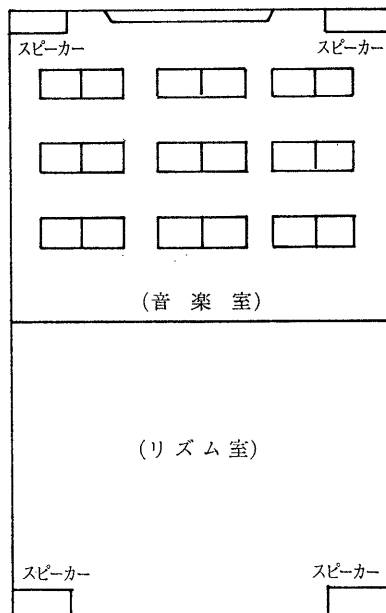
音楽鑑賞活動の段階について Copland は、次の三つの段階を示している。

(ア) 音楽を感覚的にとらえる段階

(イ) 音楽のもつ表現力を感じとる段階

(ウ) 真に音楽的に理解する段階

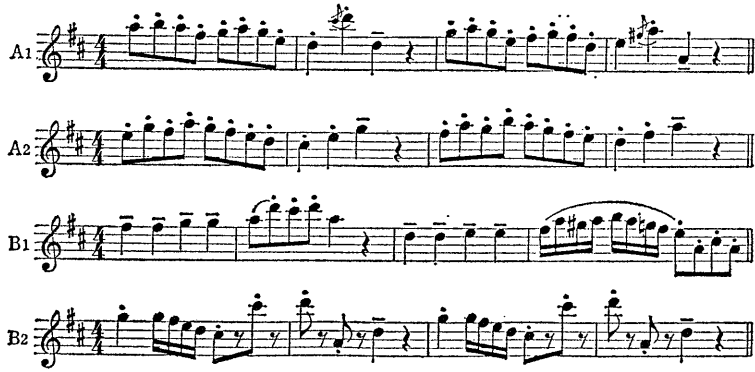
(ウ)音楽を感覚的にとらえる段階とは、音楽鑑賞活動においての第一歩であり、音楽全体の雰囲気を感じ覚的に受けとめたりする段階である。低学年においては音楽的な理解も不十分であり、また、身体的に未分化なこの時期においては、鑑賞曲をどのようにとらえさすかによって、その鑑賞指導の方法も変わる。低学年では、鑑賞において感覚的に音楽をとらえさすことから始めねばならない。指導要領B「鑑賞」 (1)鑑賞能力に関する指導内容において、(ウ)旋律を口ずさんだり、身体反応をしたりしながら聴くこと（第1学年、第2学年） (イ)リズム、旋律及び速さの特徴に気を付けて聴くこと（第1学年、第2学年）とある。旋律を口ずさむとか身体反応をしながら鑑賞さすということは、そのことにより感覚的に音楽をとらえさすということに外ならない。さて感覚的に音楽をとらえさすとなれば、具体的にどのような指導が考えられるであろうか。ある楽曲を鑑賞さす場合に、机を前に腰をかけ聴かすのみでは、身体反応をしながら鑑賞さすとか、リズム、旋律、速さなどの特徴を身でもって感じさせることは不可能である。児童が鑑賞曲を聴き、自由に身動きできる環境であればこそ、その音楽が表現しているものを自由な発想のなかで、感覚的に理解さすことができるのである。自由に身動きできる環境となれば、現在の学校教育における音楽環境の改善からはからねばならない。自由に身動きができ、身体反応に応じ感覚的に音楽をとらえさすには、音楽室とリズム室とが同室に設置されることが望まれる。鑑賞においてリズム室の活用によって身体反応させたり、児童達が感じたままを、身振りをつけ自由に表現させることにより、感覚的に音楽をとらえることも可能となる。例えば、鑑賞教材がスキップのリズムをテーマに作られているとすれば、事前にそのリズムの指導を行い、鑑賞曲に合わせながらスキップをすることにより、リズムの特徴を感覚的にとらえさすことができるのである。速度に関しても、鑑賞教材の速度に合わせ表現さすことを通して、速度感の理解に導く。いわゆる鑑賞によって聴覚から速度を理解しながら、身体表現をさすことによって、感覚的に身につけさすことができるのである。低学年の鑑賞においては、指導における環境をととのえることが先ず第一条件である。



次に低学年における共通教材の指導の展開を記しておく。

<第1学年>

「ガボット」 ゴセック作曲



曲は、moderato（中位の速さ）であり、 $\frac{2}{2}$ （または $\frac{4}{4}$ ）拍子からなる軽快なリズムの舞曲である。A—B—A の複合三部形式。軽快なリズムと、大変親しみやすい旋律であるため、児童にとってもなじみやすい曲である。舞曲のため、自由な発想で曲に合わせ踊らせつつ、曲を理解させる。曲の速さについては、手拍子を打たせたり、行進をさせながら理解を深めていく。バイオリンの軽快な響きを味わわせる。

「おもちゃの兵隊」 イエッセル作曲



行進するおもちゃの兵隊の描写音楽である。ファンファーレから始まる序曲によって曲は始まり、A—B—A の複合三部形式にまとめられ、コーダ（結尾部）が付けられている。描写音楽であるため、物語風なところもあり、情景を想像させながら聴かせる。指導者の方で話のすじを作り、身体表現をさせながら聴かせることにより、一層音楽を楽しませる。

「おどる子ねこ」 アンダソン作曲



原曲は、「ワルツイング・キャット」という曲名の描写音楽で、その内容は、低学年児童にとって興味をおこさせる曲である。例えば、Aの旋律2～3小節目にかけて、バイオリンが奏するねこの鳴き声とか、最後の部分で、ねこが犬の声で逃げる様子など、身体表現を通してその情景を想像させながら理解させる。また、それぞれの動物がどのような楽器で表現されているか、その音色にも気をつけて聴かす。AとBは、それぞれ速度が変わるため、身体表現をさせながら速度の変化をとらえさせる。

<第2学年>

「かっこうワルツ」 ヨナーソン作曲



A—B—A の複合三部形式で作曲され、序奏、コーダ（結尾部）ともかっこうの鳴き声を音楽であらわしている。3拍子の舞曲であり、3拍子の軽快なリズムを味わわせながら、踊りの音楽を理解させる。弱起の曲のため、拍子をとらせるのにかなり難しい面があるが、音楽に合わせ、手拍子を打たせることから理解させる。AとBは、かなり曲の感じが違うため、Aのリズミカルな面と、Bのなめらかに進行する流れを、身体の動きから感覚的にとらえさせる。

「トルコ行進曲」 ベートーベン作曲



演奏形態は、ピアノ独奏曲と管弦楽曲があり、演奏形態によって同じ曲であっても、どのような違いがあるかを比較させるためにも、ピアノ独奏曲と管弦楽曲を鑑賞さす方がよい。曲は、A—B—A—B—A—コーダで構成され、同じ旋律が、何度となく反復されるので、児童にとって覚えやすい曲である。「かっこうワルツ」の3拍子で踊る感じと、2拍子である行進曲の感じを、対比させながら聴かすことも、拍子の理解に役立つ。

「メヌエット」 ヘンデル作曲

（歌劇「アルチーナ」から）



弦楽合奏で演奏される舞曲である。その主題は、バイオリンで奏され、3拍子の美しい旋律である。A (a a') B (b b') を繰返し演奏される。鑑賞曲ワルツやガボットの舞曲などと聴きくらべ、舞曲の違いを感覚的にとらえさせる。簡単な振り付けを考え音楽に合わせて踊らすことにより、踊りの曲（音楽）であることを理解させる。バイオリンを中心にした弦楽合奏の美しい響きを味わわせる。

以上、低学年の鑑賞共通教材の指導の展開を簡略に記してきたが、低学年では、特に感覚的に音楽をとらえさせる点において、身体反応つまり身体表現を通して、音楽全体やリズム、速さなどを理解させていくことが大切である。

ロ 中学年の鑑賞指導

低学年においては、感覚的に音楽をとらえ、リズム、旋律、曲の速度感などを、身体表現を通して理解する学習を積んできた。中学年ともなれば、それら身につけたものをもとに、楽曲の特徴とする要素に気づかせる能力を養うことを、指導要領で記されている。例えば、部分的な曲の変化、反復などを聴きとらせ、曲の形に気づかせながらその対照的な美しさを味わい、曲のまとまりを感じさせる。また、各楽曲で主に演奏される楽器、共通教材からとりだすと〈3年生〉バイオリン、トランペット、フルート〈4年生〉チェロ、ホルン、クラリネット、オーボエの音色に親しませ、その他色々な楽器の音色に関心をもって、聴く態度を身につけることを、指導内容の目標としている。このような目標をもとに、音楽鑑賞を進める指導方法として、一例をあげ考察してみたい。

レコード鑑賞前に、指導者は、指導に際しての楽曲に関する理解を深めておくとともに、児童からの質問に対して即答できるようにしておくためにも、鑑賞教材の資料を理解しておかねばならない。また、児童に対しては、楽曲の変化や楽曲で演奏される主な楽器などを、興味深く理解さすため、楽器解説を含めた楽曲に関する解説（テープ吹込）とスライドを用いて事前指導を行うことにより、あらかじめ鑑賞曲の理解を深めておく。

第3学年鑑賞共通教材、歌劇「軽騎兵」序曲（スッペ作曲）を例にして、教材用の鑑賞にお

ける資料，及び児童に対する事前指導について具体的に示してみる。

第3学年鑑賞共通教材

歌劇「軽騎兵」序曲 スッペ作曲

I 〈指導者資料（教師用）〉

1 作曲者について

スッペ, Suppe (1819～1895) ウィーンで活躍した作曲家。少年時代からフルートの演奏に長じ、13歳頃から和声学を勉強し、ザーラのフランシスコ教会のためのミサ曲を作曲した。父の死後ウィーンに移り、ジーモン・ゼヒター、イグナーツ・クサヴァー・ザイフリートに師事。後に指揮者、作曲家として活動を始める。43歳の時から76歳の生涯を終えるまで、作曲面においては、特に喜歌劇作曲家として名声を得る。指揮者としては、アン・ディア・ウィーン劇場で活躍した。「スペードの女王」「美しいガラテア」「軽騎兵」など211曲に及ぶ作品を残した。当時「青きドナウ」「ウィーンの森の物語」などを作曲したヨハン・シュトラウスが活躍していた時代で、彼も、当時喜歌劇作曲家として活躍した。

2 楽曲について

| 曲の種類 | 序 曲 |
|------|-----|
| 演奏形態 | 管弦楽 |

この曲は、歌劇「軽騎兵」の中で演奏される主な旋律を5つとりだし、作られたものである。全体を3つに分けるとすれば(A)行進(B)戦友の死 (A)行進に分けられ、曲の最初に、出発を告げるトラン

ペットのファンファーレ（序曲）と、最後にコーダがつく。

序 奏 

行進の
テーマ 

戦友の死 

序曲は、オペラの最初に演奏されるもので、そのオペラの内容を暗示したり、オペラの中でてくる旋律を、とりまとめたものである。

3 指導の展開

- イ) 軽騎兵の軽快な感じ及び(A)行進 (B)戦友の死 (A)行進の音楽の変化を味わわせる。
ロ) トランペットのきらびやかではなやかな音色に親しませ、楽器の形の理解も含め鑑賞させる。
ハ) 序曲及び行進の部分を口ずさませ、この曲の軽快な感じを感じとらせる。
以上は、教師用の授業に際して理解を深めておくための資料である。

II 児童に対する事前指導

<解説>

- (軽騎兵1) 今日は勇ましい音楽、歌劇「軽騎兵」序曲を、皆さんと音楽鑑賞しましょう。この軽騎兵は、スッペという作曲家が作った曲で、今から100年以上前に作られた曲です。
- (軽騎兵2) オーストリアで活躍した作曲家スッペは、音楽の都ウィーンを中心街に住んでいました。この曲は、現在のウィーンのアベニウというにぎやかな通りに面した所で作られました。当時のウィーンは、大変静かなところだったのでしょね。
- (軽騎兵3) また、スッペは、「軽騎兵」の他にも美しい曲を沢山作りました。その功績をたたえ、ウィーン郊外にある中央墓地には、ベートーベンやシューベルトのお墓とともに、スッペのお墓もお祭りしてあり、今でも多くの人々がお参りされます。
- (軽騎兵4) さて、皆さんはトランペットという楽器を既に知っていますね。今日鑑賞する「軽騎兵」序曲の最初は、このトランペットが中心に演奏されます。トランペットはどのような音をだすのでしょうか。それではこれから演奏される最初の部分を聴きましょう。(序奏の部分鑑賞) 大変勇ましい感じがしましたし、また、トランペットは、きらびやかではなやかな音ですね。さあ、それでは、馬に乗った勇ましい姿の「軽騎兵」を見ながら、音楽を聴きましょう。今聴いたトランペッ



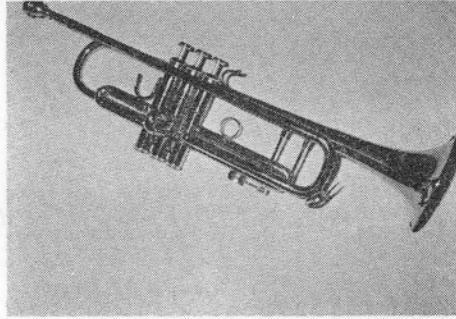
(軽騎兵1)



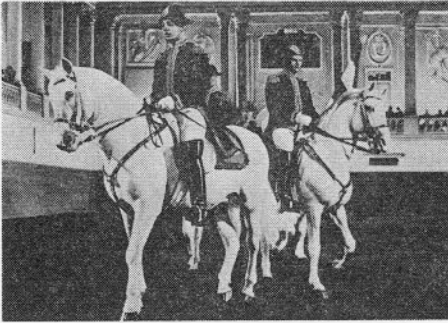
(軽騎兵2)



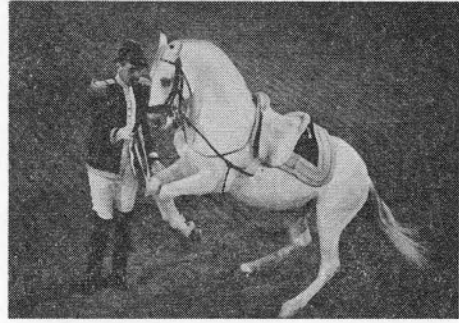
(軽騎兵 3)



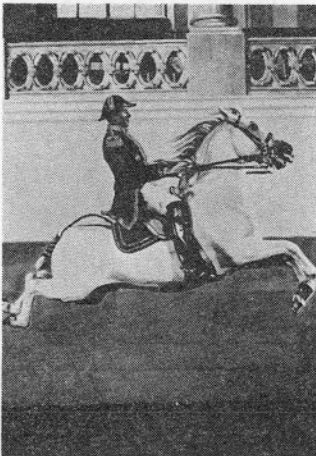
(軽騎兵 4)



(軽騎兵 5)



(軽騎兵 6)



(軽騎兵 7)

トの他にも、色々な楽器の音色がでできます。
よく耳をすまして聴きましょう。

(全曲鑑賞)

(軽騎兵 5, 6, 7) ※軽騎兵 5 一行進

軽騎兵 6 一戦友の死

軽騎兵 7 一行進

でスライドを切り替える。

大変勇ましい活発な音楽でしたが、途中少し静かなところもありましたね。最初にてきたトランペットの旋律はどんな旋律だったでしょう。思い出して口ずさんでみて下さい。

〈解説〉はテープ吹込みによる。

(軽騎兵 1 …) とあるのは、スライドであって、上記のような情景が写し出されている。

以上は、レコード鑑賞の事前指導として、一例を示したものであるが、児童に、鑑賞曲「軽騎

兵」序曲を、視覚（スライド）と聴覚（テープ）から理解を深めることを目的に、指導するものである。（軽騎兵1）では、これから聴く音楽のイメージを描かせ（軽騎兵2, 3）においては、作曲者スッペに対する理解をする。（軽騎兵4）では、トランペットの音色及び楽器の形を理解し（軽騎兵5, 6, 7）において、全曲を聴かせながら、「軽騎兵」序曲の変化、つまり曲の形に気づかせることをねらっている。

鑑賞にあたって、その指導方法は、多種多様であるが、指導に際し大切なことは、興味ある指導内容、児童にとってわかりやすい指導であろう。児童が楽しみながら聴くレコード鑑賞により、意欲が高められ、効果的でより高い授業の発展が考えられるのである。

ハ 高学年の鑑賞指導

小学校高学年ともなれば、音楽的活動も活発となり、音楽に対する理解力もかなり培われてくる。合奏する力、合唱する力、読譜力、楽器を演奏する能力もかなり進歩する。また、鑑賞する聴き方も、感覚的に音楽をとらえ、リズム、速度感などを身体表現を通して理解した低学年、楽曲の形、音楽の変化、反復を聴きとる力及び楽器の音色を味わいつつ鑑賞した中学年から較べれば、より高度な鑑賞のしかたへと進むのである。高学年では、鑑賞曲の美しさを全体的に味わいつつ、音楽の要素と曲想とのかかわりに気をつけ、楽曲の構成を分析的にとらえて聴くこと、また、楽器の音色及び人の声の特徴を感じたり、それらの組み合わせによる響きを味わいつつ鑑賞することが指導内容の基本とされている。中学年においては、曲の構成のとらえ方として、反復及び変化に気づかせながら、その対照の美しさを感じとらせ、そのことから分析的な聴き方を漸次身につけることを目標としていた。然し、高学年ともなれば、各部分の旋律がどのような形で変化するか、また、楽曲全体の構成がどのようにまとめられているかなど、また、リズム、旋律、拍子、和声、速度、強弱、音色など、音楽に含まれる色々な要素とか、楽曲全体の構成が、作曲者自身のイメージと創造によって、表出されていることを理解することも可能である。例えば、6年生鑑賞共通教材「春の海」は、作曲者宮城道雄が、春の海ののどかさを、日本の楽器と旋法によって、その情景を音楽に表現したものである。指導においては、尺八と箏の調和のある調べを味わわせつつ、楽曲の構成が、三部形式によって作られていることを理解させる。次に、形式の各部分（第一部(A) 第二部(B) 第三部(A)）が、作曲者





第一部の情景（スライド）

のイメージが、どのような形で音楽として創造されているか、分析的にとらえさず指導を考えてみる。

（第一部）陽春の光さす静寂な春の海辺、

波の音、かもめの声などを情景として作曲されている。曲は速度ゆるやかにして、箏が、低声部で静かに打寄せる波を表現し、尺八が、高声部でのどかな春の海辺の風景を表わしている。打ち寄せる波とか春の海辺の表現を、作曲者がどのようなリズム、旋律、音色、速さで表わそうとしているか、その情景と音楽のなりたちを理解させる。また、スライドを用い、第一部の情景を視覚からとらえさせながら、鑑賞さすこ

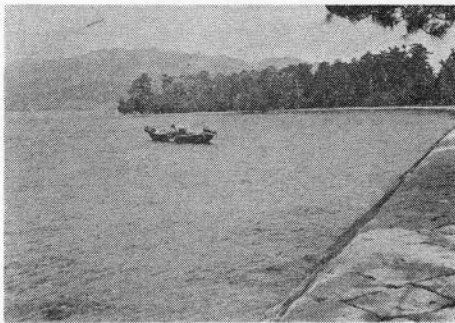
とにより、作曲者が想像した情景が、どのような形で音楽に表現されているかについても、具体的に理解を深めることができよう。

（第二部）箏のこまかなリズムの変化と、尺八によるなめらかな旋律の対比が、調和よく流れ、櫓拍子や、のどかな船



歌を表現されていることを理解さす。

また、第一部ののどかな春の海の情景から、櫓拍子とかのどかな船歌にうつり変わった情景を、スライドにより視覚から理解し、第一部から第二部にかけて、音楽がどのように変化し作曲されているか、その違いを聴きとりながら、曲の形を理解さす。



第二部の情景（スライド）

鑑賞指導において、聴く音楽の曲名や内容を、事前に知らせずに聴かす方がよいとよくいわれる。然し、そのことは、鑑賞する音楽の種類によって、効果あるものとそうでないものとを判断せねばならない。特に描写音楽とか標題音楽については、曲名を知らせ、音楽で何を表現しているかという指導が必要である。児童は、それによって音楽の要素や、音楽の表現なども学びとるのである。

児童は、鑑賞することにより、音楽の総合的な理解を深め、演奏における表現のしかたや、創作における曲の作り方などにも、大きな力となるのである。意図もせずただ音楽を聴かすの

人 文 学 論 集

みでは、鑑賞において何の効果も望めない。子ども達の発達をみつめ、音楽的な理解力を観察しながら、指導内容を豊富にすることにより、児童により優れた音楽的能力を、身につけさせることができるのである。

参 考 文 献

| | | | |
|--------------------------|---------------------|-----------|------|
| J. L. マーセル著 M. グレーン 訳 | 音楽心理学 | 音 楽 之 友 | 1971 |
| 供田武嘉津 浜野政雄 | 新版音楽教育学概説 | 音 楽 之 友 | 1973 |
| 高萩保治 | 音楽鑑賞教育法 | 音 楽 之 友 | 1974 |
| 目黒三策 | 標準音楽辞典 | 音 楽 之 友 | 1971 |
| | 季刊音楽教育研究 No. 5 | 音 楽 之 友 | 1975 |
| | 季刊音楽教育研究 No. 33 | 音 楽 之 友 | 1982 |
| 高山正喜 久将 真篠 他 | 教育学講座13 造形と音楽の教育 | 学 習 研 究 社 | 1879 |
| 斉藤次郎 石堂 豊市 | 音楽科教育の研究 | 東 京 書 籍 | 1972 |
| 金子孫 福井直弘 | 現代教育活動事典 | 世 界 書 院 | 1982 |
| 藤田恵一 | 小学校音楽指導の研究とその実践 | 葵 書 房 | 1973 |
| 堀内敬三 | 入門期の音楽指導 | 明 治 図 書 | 1966 |
| 三瓶政一朗 | 音 楽 史 | 音 楽 之 友 | 1953 |
| | リズム指導 | 音 楽 之 友 | 1975 |
| 宮野政夫 木本治子 柳生 力 | 小学校音楽科の授業構造 | 音 楽 之 友 | 1971 |
| 東京教育大附小 初等教育研究会 | 音楽科教育の理論と展開 | 第 一 法 規 | 1980 |
| 高山清司 | 音楽科現場の指導技術 | 東 洋 館 | 1974 |
| | 音楽科・その教育 | 葵 書 房 | 1973 |
| H. M. ミラー | 音 楽 史 | 東海大学出版会 | 1977 |